

# ディルタイにおける「構造」概念

森 本 司

構造主義以来、「構造」(structure)という語も、人文系の学問において定着した。今日、「構造」という語なくしては、学問の記述も困難になってきている。だが、思想的には、「構造」概念は十九世紀においてすでに準備されていた。十九世紀における「構造」概念に関する一研究として、本論文はディルタイの「構造」(Struktur)概念を扱う。構造主義の祖と言われるソシュールには、確かに「構造論」的な思想が顕著だが、ファージュによれば、structureという語は用いられていない。それに対して、ほぼ同時代に、ディルタイは「構造」という語を使用して、独自の「構造論」を展開していた。従って、「構造」という語を用いて自らの理論を築いた点で、ディルタイを取り上げることは不当ではないだろう。

エビングハウスの批判以来、ディルタイは心理学から解釈学へ中心を移動させ、それに伴って、心理学の中心理論であった「構造論」が、確かに前景から退ぞいた。しかし、ディルタイの思索態度の根底には、「構造論」的傾向が深く広く根づいている。そこで、本論文は、ディルタイにおける「構造」概念の位置づけと、それに

基づく彼の思想態度や記述の仕方の特徴(相対主義的な側面)について論議する。それと云うのも、彼の思索や記述の仕方が、彼の思想を特徴づけているからである。つまり、まず初めに、「構造」概念の普遍性と相関性との関係が、次に、その関係における問題は、「構造」概念に基づく視点だけでは不十分であることが論述される。

## 1

「構造」という語は、ディルタイにおいて、すでに一八九〇年以前に用いられているが、本格的な議論の対象となったのは、一八九四年の「記述的分析的心理学の構想」(以後、「構想」と記す。)という論文からである。そして、その内容は、一九〇五年の「精神諸科学の基礎づけのための諸研究」(以後、「基礎づけのための諸研究」と記す。)に引きつがれ、後の『精神諸科学における歴史的世界の構成』(以後、『歴史的世界の構成』と記す。)にも受けつがれている。ただし、Struktur という語が使用されていない場合でも、「構造論」的な思想は以前より顕著である。

「ロック、ヒュームおよびカントが構成した認識主観の血管に流れているのは、本物の血ではなく、単なる思惟としての理性的希薄な液体である。だが、全体としての人間を歴史的並びに心理学的に研究することによって、たとえ認識が、知覚、表象、思惟という素材だけからその概念を作り出しているように見えても、認識やその概念(外界、時間、実体、原因)の説明の根底に、様々な諸力を持ったこの全体としての人間、つまり意欲(欲)の感じつつ表象する存在者を置くことになった。」(D, XVIII)

後に述べるように、この『精神諸科学序説』(以後、「序説」と記す。)の序文に示された内容には、すでにディルタイにおける「構造論」的な思想が、この時期(一八八〇年前後)に深く根づいていたことを示している。

また、「構造」という語の使用範囲は、個人の心的生の問題から拡大されて、生や歴史の問題に及んでいる。従って、「構造」概念は、ディルタイの思想の根本形式の一つであると考えられる。ボルノーも、「構造」概念はディルタイの思想の全体を貫く形式の一つであり、ここからわれわれは、彼の考察法の特徴を理解することができる」と述べている。

ディルタイにおける代表的な「構造」概念の規定は、「構造とは、諸過程が交代し、心的な構成要素が偶然並存し、心的体験が続いて起こる中で、個々の心的連関を相互に関連させる諸関係の総体」(VII, 16)である。これは、「基礎づけのための諸研究」の「第一研究」で、公表された論文における定義である。さらに、「構造」論文でも、次のような規定が見られる。「表象、感情と意欲の種々

の過程がそのような連関にまとめあげられることによって、心的生の構造が形成される。」(V, 210)「生の統一体が環境から作用を受けたり、環境へ作用したりすることによって、内的状態の分節化が生じる。それを心的生の構造と表す。」(V, 200)また、『歴史的世界の構成』でも、次のように定義されている。「心的構造とは、心的生の統一体において種々の機能が互いに結びついたものである。」(VII, 131)

以上の規定をもとに、ディルタイは一八九六―一九七七年の草稿の中で、「心的構造」の根本性質を次の三つにまとめている。第一は、「自同性」(Selbstheit)である。「構造において、まずはじめに、個々の過程や状態が、それらすべてのうちにある自同性の意識によって結びつけられている。」(VIII, 180)「心的生における事象は、バラバラに並んでいるのではなく、この「自同性」のうちで、全体と部分の関係を形成する。それは、可変的で多様ではあるが全体性を保持している。第二は、知情意である。「心的生の二番目の根本特性は、構造連関において、知覚と思惟が衝動および感情と、そして、これらが意志行為と結びつけられているその仕方である。」(a. a. O)これに関しては、以下に論じられる。第三は、「分節化」(Artikulation)または Gliederung)である。「あらゆる認識の根底にある心的生の三番目の性質は、分節化である。」(VIII, 181)「知情意の三者がさらに細かく質的に分化・分節され、多様性を帯びてくる。

以上の規定から、彼が「構造」という語で表わそうとしたことは、主体と外界との生の交渉における全体と部分との緊密な諸関係の総体、すなわち、全体と部分との相関的で動的な関係性である。従っ

て、知情意の全体的立場から心的事象の諸関係を規定した連関が、「構造」として示される<sup>(5)</sup>。

このような「構造」概念を明確にするには、その要素である知情意に注目する必要がある。それと言うのも、ディルタイが「構造」あるいは「構造的」という語を使用する時、また表立ってその語が用いられていない場合でも、知情意と密接に関わる三つ組が想定されているからである。以下に述べる内容は、表面的なリストにとどまるが、しかし、それだけでも、「構造」に関する内容がディルタイの思索のうちどれほど深く浸透しているかが理解できるだろう。

## 2

認識論の分野では、ディルタイの著作は未完であり、断片的で統一されていない。また、分析も途中で中断され、中途半端な印象を与える。だが、先述した知情意に代表される三つ組がそこに想定され、分析されている。ディルタイ自身次のように述べている。「論理学とさらに知識の全理論を現実認識への優位なる関係から解放し、現実認識と同じく、価値規定や目的定立、規則代与に対しても関わるような論理的で科学的な諸命題を形成することが重要である。」(VII, 45) これに対応して、「基礎づけのための諸研究」の「第二研究」では、「対象的把握」と「対象的把持」とが分析されている。つまり、前者が、先に述べた三つの組の知にあたり、後者が情と意にあたる。これら三者は、統一されて精神諸科学の基礎づけの一部となる。

「対象的把握」では、所与の事実関係の意識と判断が扱われる。

ここでの問題は、我々の体験の实在性とその明証性である。我々の体験とその判断が合致した場合に、「真」なる概念が現われる<sup>(6)</sup>。

「対象的把持」の情の部分では、まず感情の要素が強度と質的區別によって述べられる。感情は、その肯定的な方向において、快(Lust)、適意(Gelassen)、是認(Billigung)と、否定的な方向において、不快(Unlust)、不適意(Mißfallen)、否認(Mißbilligung)と強度を増す系列に排列される。また、質的には、快と不快、適意と不適意、是認と否認というように区別される。これらの組み合わせと強度の違いによって、感情に多様性が現われる。さらに、憎悪や恐怖等の自己の「状態感情」(Lagegeföhle)と感情による対象の色づけである「対象感情」(Gegenstandsgeföhle)が、そして、それに基づく価値形式が論じられる。

「対象的把持」の意の部分では、ある事態を実現する時の目的、その努力、決意、それに伴う手段の選択等の態度の分析や、目的を中心に結びつけられた連関の分析などが展開されている。

以上の三者は、現実内容、その価値、それに基づく現実変化の實現(目的)として統一される。その三者の統一において、知が前面に現われると、対象(体験内容)の实在性が問われ、その対象の实在性が知によって認められると、「真」なる概念が顕在化する。

この時、情意は、この「真」を成立させるのに不可欠ではあるが、前面には登場しない。情(感情)が前面に現われると、感情に含まれていた内容の意識的な明示としての「価値」が、意(欲)が登場すると、実現されるべき状態としての「目的」が、分析によって浮かび上がる。

「なるほど、精神的物理的統一体がそれ自身の内でまとめられて  
いるのは、次のような点によってである。すなわち、この統一  
体にとりそれ自身の意志において立てられたものだけが、目的とな  
ることができ、それ自身の感情において与えられたものだけが、  
価値あるものとなることができ、それ自身の意識にとり確実に明  
白であると確かめられたものだけが、現実的で真理となりうる、  
ということによって。」(I, 30<sup>(7)</sup>)

だが、同時に、知は「真」に、感情は「美」に、そして、意志  
(意欲)は「善」にも対応させられるので、「真」はこの「真善美」  
の図式に配置されるとすれば、先の「価値」と「目的」と並ぶもの  
は、むしろ「意義」(Bedeutung)ということになる。「意義」は、全  
体と部分、部分と部分との関係において、全体における部分の位置  
づけを示す。以上の「意義」、「価値」、「目的」は生を把握する視点  
である生のカテゴリーとして位置づけられる(従って、認識論から  
カテゴリー論へ、先の知情意の三つ組は持ちこされることになるが、  
ここには、ディルタイにおける別の根本傾向が見られ、その議論が  
必要とされるので、本論文では、その指摘にとどめる)。

### 3

有名なディルタイの世界観論においても、先述した知情意の三つ  
組が登場する。

「あらゆる世界観は、生の謎を完全に解こうとする時、一樣に同  
じ構造を含む。この構造はつねに関連であり、そこで世界像の基  
礎に世界の意義と意味についての問いが解かれ、ここから理想、

最高善、生活態度に関する最高原則が導出される。この構造は、  
心的な規則性により規定される。その規則性によれば、生の経過  
における現実把握は、状態や対象を、快・不快、適意・不適意、  
是認・否認のうちで価値づけるための基礎であり、この生の評価  
は、続いてまた、意志規定の下層をなす。我々の態度は、きまっ  
て、これら三つの意識状態を通る。」(VIII, 82)

ここから、世界観は知情意の三つの意識状態と深く関わることが  
分かる。その三つ組は、構成要素として世界観に含まれる。世界観  
を構成する要素の一つは、「世界像」(Weltbild)で、これは知に對  
応する。第二は、「生の経験」(Lebenserfahrung)あるいは「生の評  
価」(Lebenswürdigung)で、これは情に對應する。第三は、「生の  
理想」(Lebensideal)で、これは、意に對應する。「世界観の構造に  
は、生の経験と世界像との内的連関が含まれている。それは、そこ  
からたえず生の理想が導き出されうる関連である。この三つの領域  
(宗教、哲学と詩の領域のこと―引用者注)における高度の産物の  
分析によって、また、現実と価値と意志規定との関連によっても、  
このことは、分かる。」(V, 380)

「世界像」の分析の中心には、「対象的把握」による現実認識が  
関与している。

「世界観の基礎は、つねに世界像である。世界像は、認識の規則  
的な段階において営まれる我々の把握の態度から生ずる。我々は、  
内的な諸過程と外的な諸対象を観察する。我々は、基本的思考諸機  
能を介してそこにおける現実的なものの根本関係を明らかにす  
ることによって、そうして成立した諸知覚を解明する。諸知覚が

過ぎ去ると、それは、知覚の偶然性を越えて我々を高める表、象界において模写、され整理される。続いて、こうした語段階において増大していく精神の堅固性と自由、精神の現実支配は、現実的なものの連関と本質を普遍妥当的に把握する判断と概念の領域で完成される。」(VIII, 83. なお、傍点は引用者による強調を示す)

続いて、この「世界像」を基礎に、「生の経験（評価）」が、世界観の第二の構成要素として示される。「そして、ここで、この現実認識を土台に、類似した規則的な段階において、別の類型的態度が成立する。…（中略）…感情的態度のこれらの段階を経て、世界観の構造に、いわば第二の層が形成される。つまり、世界像は生の評価と世界理解の基礎となる。」(a. a. O.) 「生の経験」では、「世界像」つまり現実認識に基づいた感情的態度における価値評価が論じられる。そして、「心的生の法則性に従って、生の評価および世界理解から最高の意識状態、すなわち理想、最高善、最高原則が成立する。」(VIII, 83f.) 「生の理想」では、我々の意志的行為を通じての実践的な活動が示される。

以上の三つの構成部分は、あらゆる世界観に見られ、その構成要素の強弱により、有名な三つの世界観が登場する。知、つまり「世界像が優位になると、「自然主義」（世界認識を因果関係に従って現実把握に限定する世界観）<sup>(9)</sup>が現われる。情、つまり「生の経験」が優位になると、「客観的観念論」（諸事物の根源が世界連関を決定する）という世界観<sup>(10)</sup>が、また、意、つまり「生の理想」が中心になると、「自由の観念論」（自由意志の体験を堅持し、それを世

界の根底に投影する」世界観<sup>(11)</sup>が成立する。<sup>(12)</sup>

#### 4

時間論の分野においても、知情意がそれぞれ過去・現在・未来と関連し、現在を中心に統一されている。デルタイで時間論が表面化したのが晩年のため、記述がきわめて断片的で、論述の量もかなり不足しているが、それでも、上述の三つ組との関連が見てとれる。「想起において（想起起こす時）、初めての意義のカテゴリーが現われる。現在は実在性に満ち、我々はこの現在に肯定的あるいは否定的な価値を与える。そして、未来へ目を向ける時、生の目的、理想、形成というカテゴリーが生ずる。」(VII, 236) また、「想起において、生涯の過ぎ去った各部分を結ぶ連関が、意義というカテゴリーでとらえられる。我々が、実在性に満たされた現在に生きる時、肯定的あるいは否定的な価値を感情において経験する。そして、未来へ目を向ける時、この態度から目的のカテゴリーが成立する。」(VII, 201)

「意義」という対象の位置価値は、想起において現われるから、知は過去志向的である。感情において対象の実在性が生き生きと与えられるから、情は現在志向的、意志は事態の実現を目指し、目的を定立することから、意は未来志向的となる。そして、その三者は次のように統一される。「現在が、過去の表象と、可能性を追求する想像のうちに、またその可能性のもとで目的を定立する活動のうちに未来とを含んでいるのは、ただ生においてのみである。それゆえ、現在は過去によって満たされ、未来をうちに宿していることにな

る。』(VII, 232)

こうして、体験が統一をなすと述べられる際、知情意に関わる諸機能が、そこでは統一され、時間もまた直線的ではなく、過去と未来を孕む現在として、諸機能と統一されている。これにより、「構造」の発展も、「構造」自らのうちに、その契機を持つことになる。

5

さらに、「体験・表現・了解」の連関のうちにも、従って、彼の解釈学においても知情意を中心とした連関が想定されている。「体験と了解は、心理学的に見れば、つねに分離している。それらは自己と他者の領域に属する。前者および後者の過程は、つねに別々であるが、それらの間には構造的な連関が成立している。」(VII, 315)「体験に対してその表現が、そして表現に対してその了解が構造的に関係している限り、精神諸科学に属する固有の形成物が成立する。」(VII, 318)

了解の対象となる表現は、体験の表現として「構造的」な規定をうける。また、体験も「構造的」統一体として示され、「体験・表現・了解」の連関も「構造的」に結びつけられているとすれば、了解もまた、「構造的」に作用すると考えられる。主体における「構造的」統一を形成させる表現の了解は、「対象的把握」、価値感情、それに了解目的・意図の三者の結びつきを通して分析される。以上の考察から、主体と外界との相互作用もまた、多層的な「構造的連関」として示すことができる。<sup>(15)</sup>

これまで、「構造」および「構造的」という語が、ディルタイの

心理学はもとより、認識論、カテゴリー論、世界観論、時間論、解釈学等に関与していることが論じられた。しかし、ここで重要なことは、個々のリストの関連ではなく、個々のリストの現われ方の関連である。知が前面に現われるという表現や、情が中心となるという記述の仕方は、統一体を前提にしてはじめて可能であって、知情意に関わる諸機能を集めて統一体が形成されるわけでは、決してない。そのような記述のうちには、心的状態の把握の視点とそれに対応する内容が現われている。従って、知が主に論じられる場合には、知情意がその場に含まれていないのではなく、背景に退きながらも現在の議論に関与している。図式的に述べた内容には、すべてこのことが当てはまる。「自然主義」は知情意の知の肥大化したものだが、その肥大化を支えるべく、情意も深くその土台に根をはっている。

6

以上の考察に続いて、ディルタイの「構造」概念から別の特性が現われてくる。「構造」概念において顕在化するものは、関係性である。この関係性は、部分の単なる総和によっては生まれず、また部分の変質が全体に変化を与える関係であるから、相関性と言うことができる。

相関的なある部分を分析的に取り出すと、いわば、いもづる式に他の部分が引きずられてこざるを得ない。しかし、分析の対象はそのある部分だから、他の諸部分は関連しながらも、覆い隠される。

さらに、このような部分を含む統一的全体は、他の全体とも相関し、

そのつるはあらゆる部分に付着する。

しかしながら、ディルタイによると、始まりと終わりで仕切られたところに、部分と全体との連関が生じ、部分の「意義」、全体の「意義」が規定される。

「私であれ、他人であれ、国民であれ、個体が経験する生の意義がどこにあるかということとは、そのような意義が成立しているということによって一義的に決まるのではない。意義が生じるということは、想起する者にとって、体験可能なもの意義として、つねに確実である。最後の瞬間になつてはじめて、意義の見積りが可能となる。そして、その見積りは人生の最後の瞬間に、あるいは生を追体験する人に、単に本来一時的に現われるに過ぎない。」(VII, 287)「それ(生における部分と全体との関係の固有な仕方―引用者注)は決して完全に遂行されることのない関係である。その遂行のためには、生涯の終わりを待たねばならないだろうし、また、臨終の時に部分の関係を確定できる全体が、ようやく概観できるだろう。」(VII, 233)

しかし、厳密に考えると、このことは他の連関を、すなわち相関性を無視することになる。つまり、ある事象を分析するということは、その事象に相関するすべての事象との連関においてはじめて可能になる。だからこそ、ディルタイはすべての個別の精神諸科学を包括しようとしたのである。「精神諸科学の基礎づけは、あらゆる種類の知識に関与しなければならない。それは、現実認識や価値定立並びに目的規定・規則付与の領域にまで及ばなければならない。」(VII, 5)だが、このことは原理的に不可能である。事象の「意義」

(すなわち位置価)を規定することすらできない。全体と部分との連関は際限がない。それでも、分析を行うとすれば、このアポリアから出発せざるを得ない。

従つて、この困難に対処するためには、分析はつねに一面性から出発し、その内容も一面性・相対性を帯びているという自覚による他はない。「構造的」統一体である体験が、態度と内容の融合であるように、我々の認識も態度としての規定を受けると、認識内容は把握態度の一面性に基づく規定を受ける。把握という態度がある視点からなされる限り(ある視点から行われなければ、内容が統一されないが)、態度自体が一面的であり、内容もその視点に基づいて一面的な性質になる。

このことをまとめると以下のようになる。「構造」の運動の中に身を置き入れている時、その動きの全体は形成中あるいは修正中で、従つて、未定であり、個々の部分が位置づけは、未規定である。それゆえ、大まかにその運動を規定し意味づけるためには、「構造」の運動を一時中断させなくてはならない。それにより、はじめて、全体と部分との連関も定まり、統一体を分析し判断できるようになる。ところが、その中断された「構造」が、他の「構造化」に相関している限り(つまり、過去のものとして規定されていても、それは現在に取り込まれているから)、その規定も一時的、一面的で相対的なものにならざるを得ない。このことの自覚が、「構造論」的に認識する態度そのものに影響し、「構造論」の内容に一定の規制を加える。先述したディルタイの「構造」概念の図式も、それぞれ一面的な要素だけが強調されて取り出されるという仕方て成立して

いた。

「こうして、精神諸科学の基礎づけの課題を満足させる諸命題の連関を、哲学的基礎づけの全領域から取り出すとということだけが残されている。このような試みは、知識論のこの発展段階における一面性の危険を免れることができない。それでも、この理論の課題が普遍的に捉えられれば捉えられるほど、またその解決の手段が完備すればするほど、その取り扱いには一面性の危険にさらされるべからず、より少なくなるだろう。」(VII, 4)

「把握の過程は、自らの内に二つの契機をつねに含んでいる。ひとつは、概念的なものや判断的なものや体験との同一化に基づく満足と、そしてもうひとつは、体験を汲み尽くせない不満である。これに応じて、とりわけ心的把握の誤謬は、一定方向の概念構成で体験の全内容を満たしうるという錯誤にあることが分かる。」

(VII, 32)

一面性の危険は、ディルタイの自覚通り、完全には免れることはできない。ディルタイの記述が、断片的で不統一な印象を与えるのも(実際、その通りではあるが)、そうならざるを得ない理由が、以上の「構造論」から導かれると考えられる。つまり、ディルタイの記述の仕方は、一面性に対する深い自覚に基づくということである。従って、ディルタイの記述において、別の視点で用いられた命題を、単に表面的に比較すると、そこには混乱が生じることになる。ディルタイの記述内容は、その視点との相関性により規定されているので、同じ題材もその視点の相違により異なる規定を受け、一見ただけでは、その関連が見失われることになりかねない。

前半の図式の議論は、ディルタイの「構造論」をかなり肥大化させている。ディルタイにおいては、「構造論」は一般化への道のりであり、これを肥大化させることは、個性化(個別化・相対化)との相関のバランスを破壊させることになりかねない。一般化と個性化とは、ディルタイにあっては、微妙なバランスを保ち、両者とも維持されている。つまり、ディルタイの「構造論」は一般化への道を歩きつつ、個性化への道を準備していることになるのである。

さらに、以上のようなディルタイの「構造論」も、その中に他の根本的な把握の態度が隠されており、その態度との連関を失っている限り、知らず知らずのうち、一面性の危険に陥っていることになる。従って、ディルタイの「構造」概念が、彼の思索の至る所に登場しても、その「構造論」は他の根本的な視点との緊張関係において再び把握されなければならない。ディルタイの「構造論」は、現代の動的な「構造」概念に到る道を準備してはいるが、それを肥大化させることは、「生が生を捉える」という表現で示されるディルタイの思想のバランスをくずしているということを自覚して、その一面性に対処しなければならぬだろう。

#### 注

(1) J・I・B・ファージュ、『構造主義入門』、加藤晴久訳、大修館書店、15頁参照。

(2) cf. 109, 167. 表記の仕方については、注(3)を参照。  
また、ローディによる指摘もある。cf. F. Rodi, *Morphologie*



und Hermeneutik, W. Kohhammer 1969, S. 43.

(3) 本論文で使用した全集は次のものである。

WILHELM DILTHEY GESAMMELT SCHRIFTEN, 6.

Aufl., Stuttgart: B. G. Teubner 1958.

なお、全集からの引用は次のように表記した。

例、V, 320.

これは、全集第五巻の320頁を表す。

(4) O. F. Bollnow, Dilthey. Eine Einführung in seine Philosophie, 3. Aufl., Stuttgart: W. Kohhammer 1968, S. 151.

なお、本論文中の引用文は、O・F・ボルノー、『ディルタイ』麻生建訳、未来社による。

(5) また、「基礎づけのための諸研究」に次のように述べられている。「構造という事態、すなわち、ある一定の態度に基づいた、体験の構造統一、体験相互の構造的関連、最後に態度の仕方相互の構造関連が、心的連関の直観を形成する際に根拠づけするものである。なぜなら、我々が心的連関について述べる時、そこで考えられていることは何かと問うならば、それは、全体を形成する諸部分の単なる総和や総括と違って、包括的であらゆる項を結びつける関連によって構成された心的生の統一体であるからである。」(VII, 30)

(6) 拙論、「精神諸科学におけるディルタイの『了解』概念」、哲学・思想論叢、第二号、一九八四年参照。

(7) また、『歴史的世界の構成』では次のように述べられている。「それに対して、すでに見てきたように、歴史的世界の最

終的な単位 (Einheiten) は、体験と了解において与えられる。

その単位 (あるいは、統一体—引用者注) の特徴は、対象的把握、価値および目的定立が結びつけられているところである構造関連に基づいている。さらに、生の統一体の特徴は次のように体験される。すなわち、それ自身の意志において立てられたものだけが、目的でありうるし、自らの思惟に確実と認められたものだけが真であり、自らの感情に肯定的に関わるものだけが、その生の統一体に対して価値を持つものである。」(VII, 159)

(8) 拙論、前掲論文参照。

(9) cf., V, 401.

(10) cf., a. a. O.

(11) cf., a. a. O.

(12) ボルノーは、ディルタイの三つ組による世界観論が不十分であると批判している。cf., O. F. Bollnow, a. a. O., S. 74 ff.

(13) 拙論、「ディルタイにおける『了解』と『構造関連』」、哲学・思想論叢、第三号、一九八五年参照。

(14) cf., VII, 139.

(もつとよ・じかな) 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)